くないので引き裂いたり、書き直したり、又は破つたり消したりした譯ではありませ
せん。實の處をお話しすると、私が貴方に差し上げやうとする主人公の所謂『棄て
られた人妻』から惱まされるので――氣がクサ〳〵して、筆を執る事が出來ないや
うになるからです。

最初私は『オルガンを弄ぶ女』と題して見ました。然れども夫れは餘りに事件
が單純過きて、此の女を語るに相應しくないから止めました。次には、世の中には
斯う云ふ風の女もあるものだと云ふ事を知らしむれば足ると云ふので『斯う云ふ女』
と爲やうかとも考へて見ましたけれど、夫れでは少しも事件の內容が標題に現はれ
ない。何を語らうとするのか、其の意味をさへ捕捉する事が出來ないので之れも止
めました。

一寸お斷り致して置かなければなりませぬが、貴方は、『何故そんな滿らぬ事に頭
を惱ますのか』といふ御不審もございませうが、私が神經が過敏と云ふものか、又

は性格が偏狹と云ふものか、僅かの事が氣分を惡くするもので、鉛筆を使ふにして
も、其の削り方が惡ひと手に取る氣になれぬと云ふ風で、一つの文章を書くにした
處が、先づ最初に其の標題が氣に入らねば文を行る事が出來ない性質なのです。夫
れですから此の手紙を差し上げるに付ても、私の性癖から、種々に其の標題を考へ
たのです。

三度目には『姙娠して嫁に行く女教員』として、赤裸々の處をお目にかけやうと
思つても見ました。單刀直入、現代の所謂蓮ッ葉な操と云ふものを屁とも思はない
女を、皮肉に罵つて見たいと思ひました。何うやら此の標題は氣に入つたやうでし
たが、又考へると、何だか新聞の雜報標題のやうである。斯う思ふと直ぐに又嫌や
になりました――そして考へ込んで居ると、今自分の事を罵しられてるのだとも知
らずに其の女が例のオルガンを滅多鳴らしに鳴らし初めました。何と云ふ好かない
女でせう。何うして私の神經をばかり尖らせる女でせうと思ふと、私は何だか其の

女の横ッ面を毆り付けて遣りたいやうな腹立たしい氣分になりました。何の標題も宜くない。假令姙娠しても、『嫁に行く女』と云へば前途がある。夫れよりは何うせ二度あつた事は三度ある例し、何うせ將來は棄てられるのだから『棄てらるゝ女』が宜いかも知れぬ、併し既に既う二度までも棄てられて、三度目も同じ道程を歩いて居るのだから、結局歸納する處は棄てらるゝのであるから『棄てられた人妻』として、自分ながら微笑みました。

——と此處まで書いて、書き落したのに氣が付きました。それは本人の素性です。父は瓦斯會社の高給社員で上島と云ふ既う六十ばかりの老人。其の娘のお妙と云ふのが此の主人公です。女は一度嫁入りすれば、再び實家の閾は跨がぬとしたものですが、夫れは昔の古い婦人道德で、現代では二度でも三度でも平氣に戻つて來るやうですが、此のお妙も其の組の女ですが——苟くも他人の夫人である以上は、敬意を拂つてお妙さんと呼びたいが、私は此の女にさんを付ける事は出來ません——此

の本人の素性は、後に分つたので、例の私の氣性から、根堀り葉堀りして其の素性を明かにしたのです。一目見たゞけで、只の女ではあるまいと思つた直覺を辿つて後に調べたのですけれど、順序として最初に此の素性を明かにして置かぬと、要領を得難からうと思つて此處に書く事としたのです。

此のお妙は十九が初婚で、保險會社員に嫁いたのですが、半年ばかりで歸つて來たのです。女の方では、男の家庭が餘り五月蠅い、小姑はある、舅姑は無論小言の絶間はない、到底我慢が出來ないからと云ふ。併し男の方では、幾ら裁縫は上手でも、勝手元が少しも出來ない樣では困る。魚を煮らせれば焦げ付かせる、飯を炊かせればブッ〳〵が出來る、そして贅澤が好きで、朝寢が好きで、親の云ふ事は馬の耳に風ほども思つて居ない。そんな女と到底長く一緒に居る事は出來ない。一緒に居られないと思つたから離緣たのだと云ふのです。私は男の方の云ひ分を信じます爾うして離緣れて戻つたお妙は、一年ばかりは家に居りましたが。再び緣あつて嫁

いだのは遞信省の役人です。之れは舅小姑もなく、只だ夫婦二人切りの二階住居、一年ばかり一緒に居る間に、女の子が生れました。處がお妙は、直ぐに其の子を里子に遣ると言ひ出しました。驚くではありませんか、其の口實は斯うなんです。

『妾の手で子供を育てると、妾が早く阿母さん〳〵して來る、早く老けて來る。世帶染みて來る、女の生命は、何時までも若く美しいのにあるのです。ですから此の子を里子に遣つて下さい』

何と云ふ非道い女でせう。之れでは流石の良人も辟易したと見えて、夫れから夫婦喧嘩を始める樣になつたのです。結局、男の方で家を飛出したので、お妙は平氣で、赤ン坊を連れて實家に歸つた。そして赤ン坊は阿母さんに育てさして、自分は朝から化粧して、お嬢さん振つて居るのです。之れが二十一の女の思慮と云はれませうか、世間知らずと云ふのか、大膽と云ふのか、只だ驚くの外はないではありませんか。

天民さん。

斯うした女、子供まで產んで尙ほ且つそんな不了簡の女ですから、既う誰れも顧みる者は無くなりました。女が二十一や二で、子供と一緒に實家に厄介になつて、平氣に澄まして居られると云ふのは、餘程圖々しいのか、阿呆か、不貞腐れかでなければ出來ない事です。然れどもお妙は平氣なものでした。嫁入り盛りは夙くに過ぎて、花ならば既う散り際、色も香も褪せる頃となつても、お妙は化粧を凝らして自分の十人並以上である容貌を鼻にかけて、親の心配も察してやらずに、心のまゝに振舞つて居たのです。そうして果てには獨身主義と云ふものを唱へ出しました。

『妾は既う一生お嫁なんかには行きませぬ、學校の先生をして、一生獨身生活を

(二) 澄して歩く海老茶袴

續けます』

人を馬鹿にしてるではありませんか、既う一生お嫁なんかには行かない、獨身生活を續けるとは能くも此の女の口から云はれたものです。廿一や二で、嫁入口の無いと云ふ女ほど悲慘なものはありますまい。併かも十人並以上の容貌を有ちながら嫁入り口の無いと云ふのですから、世間は種々と噂の種を蒔き初めたのです。斯うなつて來ると、女は既う男に棄てられたばかりでなく、世間から見棄てられたも同樣なのです。お妙は自分の周圍が斯うなつて來れば來る程、痩我慢を出して、高慢ちきな顔をして居たのです。そして裁縫が出來ると云ふので、或る學校の校長に賴んで、其處の裁縫教師になつたのです。夫れに付いても、世間では、

『お妙さんは圖々しい女だね。校長さんを色仕掛けにして、以前の先生を追出して自分が其の後に据り込むなんかは驚いたものですね』

『今に校長さんも、お妙さんも首にされるかも知れないよ』

抔と頻りに取沙汰さるゝ樣になりました。苟くも校長たるものが、お妙の色香に溺

れて、爾う云ふ不都合な行爲があらうとは思はれませんが、又無いとは限りませぬ。兎に角お妙は斯うして女教員になつたのです。髮を束髮に結つて、袂の長い衣物を着て、海老茶の袴を胸高に、踵の高い靴を穿いて、シヤナリ〳〵と練つて歩くのは、如何にも高慢ちきでした。胸糞が惡くなる程澄まして歩いて居たのです。

學校抔云ふものは實に形式的なものです。お妙には其の後も兎角の噂は立つた。二十四五、六と三年の間には、如何はしい噂が幾度となく起つたが、お妙は裁縫が上手であるからと云ふので、相變らず學校には勤めて居ました。爾うしてお妙の生命であると云ふ、若い美しい時代も何時の間にか過ぎて、花は梢を去りました。而し斯うした女は、花は散つても、葉櫻の俤を止めるものです。お妙は若い濃艶の匂は失くなりましたが、夫でも葉櫻の清楚の眺めはありました。お妙は依然華やかに笑つて、澄まして歩いて居りました。自分の年が三十にならうが、四十にならうが自分の色香は永久に失せないものであると云ふ自信を有つて居るやうに、小面

憎いほどでありました。

夫れが、二十七になつて、尾高と云ふ會社員の妻となつたのです。自分は既うお嫁に行かぬ、獨身生活を續けると云つて居たお妙は、其の男と好い仲になつて、滿り自由結婚を爲た譯なのです。自分は一生子供を産まぬと放言して居た新らしい女の尾竹紅吉さへ、若い燕の子を産む世の中ですから、此のお妙が野合の末、自由結婚したからとて、別に不思議でもなければ、珍奇な話でもありませんが、之れが幾百の兒童に物を敎へて居ると云ふのですから、長大息を禁ぜんとして豈に得べけんやです。

以上は、私が後に至つて、只の女ではないと睨んで、其の素性を調査して、判明した事實ですが、順序として之れを前にしたのです。之れからが私の實見です——。

お妙と、尾高とは、處もあらうに、私の家の直ぐ前に越して來ました。其の第一日に、私は『尋常の女でない』と思つて、此の女を注意しました。娜婷とした身體

面長の色白く、愛嬌には乏しいが、何處となく人を引き付ける力を有つて居る女だと思ひました。年よりは總てが若扮りの、派手な浴衣に淺黄繻子と何かの書夜帶を締め、髪を銀杏返しに結つた處は、何う見ても女敎員とは思はれません。まア何々亭の仲居とでも云ふ風俗です、恰好です。

或る暑い日でした。私は二階の障子を引き外し、雜誌の原稿を書いて居ると、オルガンを彈き初めました。直ぐ下の家で、矢鱈に鳴らすのですから、私は五月蠅くてなりません。いきなりペンを投じて『惡魔の樣な女』だと思ひました。オルガンは二十分ばかりで止みました。然れども其時は、私は氣が腐つて、無意識に室中を歩いて居たのです。不圖オルガンの音の止つて居るのに氣が付いて、二階の窓から女の家を見て驚きました。實に驚きました。

淺猿しい、淺猿しい、何と云ふ淺猿しい姿でありませう。其の女は窓際に近寄りて、暑さに解いた帶のしだら無さ、脫いた浴衣の、肌露はに、燃ゆるが如き緋の腹

帶を締めて居たではありませんか。そして乳首はもう黑く膨らんで居るではありませんか、女が姙娠むのには何の不思議もありません。然れども結婚して間もなく之れですから、其の女の本體を知らるゝではありませんか。

(三) 似たもの夫婦

松崎さん。

此の女に娘の子のある事は、前にも書いてありましたね。血と云ふものは爭はれないもので、別に可愛がる譯でもないが、其の娘は毎日のやうに此の女の家に遊びに來るのです。そりやア腹を痛めた母親を、其の子が慕ふのに何も不思議はありません。美しい母娘の至情でありますが、生れて間もない赤ン坊を、直ぐに里子に遣らねば、世帶染みて、阿母さん〳〵しくなるのを苦痛に、遂ひに男に棄てられる位の女ですから、今も尙ほ子供の可愛いと云ふ味を知らないやうです。そして其の現

在自分の腹を痛めて產んだ娘が

『阿母さん』

と呼ぶのを非常に嫌つて、

『何故伯母さんと云はないのです。阿母さんと云つても返事を爲ないよ』

斯う云ふ風に、普通の母親として思ひ浮べもしないことを、平氣で云ふのに見ても、此の女の性格の一般を知る事が出來るでせう。普通から云へば、斯うした母親が、離れて居らねばならぬ悲しい運命の下に在るのですから、母として、一層娘を可愛がるものですが、此の女には爾うした母としての色は見えません。一方から考へますれば、我子とは云へ、自分は他家に嫁いた身で、爾う何時までも子供の愛に溺れて居れば、良人に對しても濟まぬと云ふ懸念から、態と他所々々しい素振りに出づるのかも知れませんが、子供を自分の手で育つるのを嫌つて、男に棄てられる位の女、更らに乳首が黑ずんで嫁入りする女——として、其の娘に對する態度を見

ますれば、爾うした良人に對する遠慮、美しい情の溢れから來た冷やかな容子だとは思はれないのです。

處がですね、其の女の冷やかな態度に反して、其の良人は怪しいほど其の娘を愛するのです。母親を尋ねて遊ひに來る度下へも置かぬとは恁麼可愛がり方だらうと思ふほど愛するのです。之れは世間の手前、浮世の義理として、生さぬ仲の娘であるから、殊更らに斯うするのかも知れません。然れども私は、此の娘を可愛がると云ふのは、結婚後――いや、同棲後間もない、細君の愛に溺れて居る弱い男として其の愛を永久に冷めないやうにと思ふ淺果敢な望みから、細君の愛に對する義務として、心中可愛くもない其の娘を愛するのではあるまいか――。つまりですね、言を換へて云へば、細君の愛情を繋ぐ唯一の手段として、其の娘を愛するのではありますまいか。細君に對する愛情を繋ぐと云ふのは、世間並の夫婦から云へば、そんな馬鹿な、鼻つ垂らしの、二本棒の、薄野呂の、意氣地なしの、廚拔け者が有るも

のかと云ふかも知れませんが、斯うして、出來合つた、野合した夫婦と云ふものは、又世間の人の想像も附かぬ事があるものです。互ひに勝手氣儘な、何時までも情夫であり又情婦であつた時の考へが去らないものですから、友達交際のやうな、勝手な、氣儘な、放逸な眞似ばかり爲て居るものです。野合から夫婦になつた者が、媒介者があつて、正式に夫婦になつた者よりは離婚者の多いと云ふのは、此の我儘が產み出すと云ふ事には誰れも異議はありますまい。惚れたと云ひ、惚れられたと云ひ合つて居る時は、只だ其の、如何にして媾引きしやうかと云ふ本能の滿足を得んと事にばかり苦心して居るものですから、其の人の欲點は目に附きません。戀愛は神聖なものであると云ひますが、神聖か不神聖か、そんな事は何うでも宜い。世間の所謂戀に落ちた男女に取つては、本能の滿足を得らるれば、夫れで戀は出來たものである。戀は考へるものではない、靜かに味ふものではない、本能の滿足實行と云ふ事に依つて初めて嬉しいものである。樂しいものである。之れが世間一般の戀で

あると云ふ事も否定する事は出來ますまい。夫れであるから、情夫。情婦であつた時代は、只だ驀然に、其の本能の滿足、如何にして相樂しまんかと云ふ事にばかり頭を向けて居るから其他の事は一切分らぬ。夫れが同棲して、本能の滿足を得られるやうになれば、靜かに其の性格を考へて見るやうになるものでせう。

話は少し岐路に入りましたが、私の云はんとする此の女と此の男も、今は情夫、情婦の時代を過ぎて、何時でも本能の滿足を得られるやうになつたのです。甚麼豪い人間でも、赤裸々にして見ますれば、其の歸着する處は此處でありませう。此の男に取つても、實際其の娘が可愛からう筈はない。自分の惚れて居る細君が、以前の男との間に產れた娘、つまり至愛の結晶體とも云ふ其の娘の可愛からう筈はない。自分が細君に惚れて居る度の强いだけ、夫れだけ其の娘が憎からねばなりませぬ。繼母と云ふものが、繼子を虐めると云ふのも、斯う云ふ心理作用からです。此の男が、其の域を超越して、細君の愛に變りないやうと、鼻の下を長くして居ると云ふ

のも怪しなものではありませんか。此の女にして此の男あり、似たもの夫婦とは此の二人の事でせう。

(四) 黑い乳首が生命の仇

天民さん。

惚れた女とは情死もします。二つと無い生命を、惜し氣もなく棄てゝ了ふものです。惡感や、不快や、それ等のものを忘れ盡して、只だ女の前に跪坐禮拜する位は何でもありますまいが。果して夫れが何時まで續くでありませう。

斯うした極端な戀は、決して長く續くものではありません。直ぐに其の熱は冷めるものです。曾て、亭主ある女が、他の男と熱烈な戀に落ちた。互ひに、隱れて密通して居たけれど、遂ひには、公然と、女から亭主に

「妾は姦通して居ります、貴方は、妾に對する愛情が薄らぎました。妾は貴方だけ

の愛情では滿足が出來ません。もつと熾烈な、火のやうな愛情が得たいので姦通しました。妾は其の火のやうな愛を注いで呉れる情夫と同棲します』

斯う云ふ大膽な告白をして、其の儘家を飛び出して、情夫と同棲して居ました。

處が間もなく此の男女は離別れるやうになりました。

『藝術と戀愛とは多くの場合相對立するものではない。女は戀に死んで呉れと云ふが、自分は藝術に生きねばならぬ男である。自分は戀は棄てゝも、藝術を棄てる譯には行かぬと云つたら、貴方は矢ッ張り妾を眞に愛しては呉れぬのですね。妾は戀は棄てゝも藝術に生きねばならぬと云ふ、貴方の不親切には愛想が盡きましたと云ふ。自分も斯う云はれては後へは引けない。ぢやア離別れやうと云つて直ぐに離別れて了つた。爾うすると其の女は、又以前の亭主の處に行つて、矢ッ張り貴方の方が妾を愛して下さる熱情が深いと云つて、其儘元の鞘に納まつた』

斯う云ふ實例がある。其の女と、私が此處にお知らせしやうとする女とは、性格

に於て、將た周圍の空氣に於て異つて居るのですから、同一視して、論ずる事は出來ませんけれど、總て斯うした、浮氣から出た極端なる戀は、冷却の度の激しいものである事は、此の一例の事實を語つて居るではありませんか。

此の女が何時まで若く美しく居られるか、既に阿母さんとなつて居ながら、棄てられた人妻の、又も野合の結果同棲して、今にも赤ン坊が產れたなら何うするであらう。以前棄てられるに至つたまでの徑路を、再び辿つて行くのではありますまいか。

『子供は自分の手許で育つれば、世帶染みます。阿母さん〳〵しくなつて來ます。從つて心まで老け込むものです。何時までも若く美しいと云ふのが女の生命です』

此の主義から棄てられた人妻の、乳首が黑くなつて居る處を見ますれば、又赤ン坊が生れるのでせう。男と一緒になつた女が、赤ン坊を生むと云ふのに不思議はありませんが、赤ン坊を生む度に、女は色の褪せるものです。恁麼女には赤ン坊の生

まれるのは、骨を削づられるやうに辛いものでせう。子供は家庭の花である。夫婦の間の鎹であると云はれて居るものですが、斯う云ふ女には子供は不必要です。邪魔者です。生命を縮める種子ともなりませう。

彼の黒い乳首が、段々大きくなつて、墨汁を塗つたやうになつた頃には、赤ン坊が飛び出すのでせう。枕直しの濟むまでは、自分の手許に置きも爲ませうが、子供を育てる事を嫌ふ此の女は、今度も亦

『里子に遣つて下さい、夫れ位の費用は妾が學校に出て儲けます』

と云ひ出すには極つて居ります。溫かい情を以て、自分の子供を愛し得ない女ですもの、其の前途は見え透いて居るではありませんか。今は未だ、同棲前の戀愛狀態の惰力で、全く夢の覺め果てぬ頃ですから宜いとして、之れが一月經ち、二月經つて、互ひの缺點が見えて來るに從ひ、今の生活狀態は、決して續くものではありません。殊には、女が姙娠すれば、其の精神狀態まで變つて來るものと聞いて居り

ます。缺點ばかりが目に付くやうになつた頃、此の女と此の男とは、果して何うなるものでせう。

又、陽氣な唄につれて、オルガンの音が起りました。大きな聲で、龜と兎の駈けくらを唄ひ出しました。之れが二十七の女です。私は此のオルガンの音と、その唄とは、何時までも若く美しく、何時までも氣儘に、そして何時までも子供と云ふものの累ひないやうにと願つて居るのではなからうかと思ひました。其の唄と其の聲と、そして何時までも若くありたい、何時までも美しくありたいと云ふ心とが、乃て又、以前の通りに『棄てられた人妻』となるのが目に見えるやうです。棄てられて、獨身主義を口にしながら、浮氣をして姙娠して、そして情夫と同棲して、子供を產んで又棄てられる。斯うした女の陷る處は何處であるか。

肌も露はに私の見た白い胸、肉付きの宜い身體、夫れが段々萎びて來た頃には、誰れの女房になつて居るやら、斯うした人の自ら招く運命ほど、哀しなものはあり

ますまい。

世の中には、斯うした女もあると云ふ。其の今影を描すつもりで、ツイ、くだらない長文句になりました。愚文失敬、頓首再拜。

□ 結婚病の女

(一) 平氣で秘密を話す女

『何人目の亭主だね』

と聞いた時、お粂は、右手の指を折つて一イニウと數へて居たが、

『今のが丁度九人目なんです』

と更に臆した色もなく云ひ放つた。

『夫うするとお前の年は一體幾歳なんだね』

『六なんですよ』

『へエー二十六で、九人の亭主を持つなんて、大變だね。一體幾つの年に嫁入りしたのだね』

『そうね、最初は十九で、二年ばかりも一緒に居たけれど、都合があつて別れました。夫れから一年に二人の亭主を持つた事もあれば、二年に三人の亭主を持つたこともあります』

お粂はてんでこんな答へをするのも平氣である。夫れを聞いて居る彼の方が、却つて意外の感に打たれたやうに、女の顔を凝視めて居た。

十九の年に始めて亭主を持つて、二十六になつて九人目の亭主と云ふと、誰れが聞いても意外に感せぬものはあるまい。貞女は二夫に見えずと云ふのはずつと昔の人の言葉で、現代ではもうそんな理屈は通らないと云ふ事位は知つて居る彼も、あ

まりの事に之には一驚を喫せずには居られなかつた。そして斯う云ふ女の心理作用は何うであらうかと、仔細にお粂の樣子を注意して居たけれど、別に通常の女と何處といつてさして變つた處もないやうだと思つた。

彼は、斯う云ふ女に逢ふ毎に、其の女の口ずから、今日まで、甚麼生活を續けて來て、どんな機會から直ぐに亭主に別れる氣になるかと云ふ事を聞くに興味を有つて居る。人の私行に關する事を聞きたいと云ふのは、あまり善くない癖であると彼自身も知つては居るが、而し夫れを聞くと云ふのは、何だか自分の職責のやうにも思はれる。彼は爾う思ひながらお粂が、何遍も結婚した女であると云ふ事を聞いて其の素性を聞いて見たい氣になつたのである。

暗い待合の一室や、十二階下邊りの暗に咲く化粧の女に對して、其の過去や現在の物語りを聞くと云ふ事は、世間有り觸れた事で、澤山の男の肌に觸れ、唇つけされた麗爛した口から、能い加減に勝手に拵へ上げた作り事を聞くと云ふのであれ

ば、何でもないが、兎に角お粂は立派な人の妻である。其の人妻に對して、『貴女は今の亭主が何人目ですか』と聞いた彼は、余程の圖々しさであるに違ひない。と同時に、女と云ふものゝ性體を見るだけの眼光を有つて居る男であると云ふ事も窺ひ得られる。

大體の女であれば、突然に斯る質問に逢つた時は、まづ顏を赤らめて、兎角返事に躊躇するものであるが、直ちに、

『九人目です』

と答へる處に、お粂と云ふ女の性體を讀む事が出來ると彼は思つた。

之れが下層社會であれば、生活に困難の結果夫婦相談別れをすると云ふ事もあるが、生活の上に何の苦勞も無い時でも、お粂は自分の氣に入らぬ事があれば、プイと自分勝手に飛び出して了ふ。後で悔ゆる事が有るか無いか知らぬが、一度飛び出せば毛頭歸つて來ると云ふ事はない。そして何時の間にか代りの次の亭主が出來て

居る。何と云ふ重寶な事であらう。彼がお粂を知つたのは、其の以前の亭主が、元の鞘に納まれと云ひ、嫌やだと云つて刄物三昧に及んだ時、生命に異變は無いか何うかと云ふ平素の好奇心から、夫れ見に行つた時からである。右の肩先きに一個所と、刄物を止めやうとして右手の掌に一個所と、夫れから後頭部に一個所の傷を負ふて、繃帶した身體を寢床の上に横へて居た。大概の女であれば、此の位の傷を負ふと、氣力の衰へるものであるが、別に苦痛の色も見せず、普通に口を利くのを見て、此の女は只の女では無いと彼は睨んだ。處が夫れから間もなく、甚麽機會で一緒になつたのか、お粂は傷が癒えると間もなく、天野と云ふ帝大の法科生と同棲する樣になつた。彼と天野とは、二三回會つた事のある間柄であるから、彼は無遠慮に尋ねて見たのである。

(二) 男を呪ふ戀の古痍か

『貴方は能くそんな事ばかり聞きたがる方ですね』

お粂は、彼が更らに、今日までの亭主に對する感想を聞かして呉れと云つた時に斯う云つて笑つた。

『今に天野が歸つて來たら、天野の前で今日までの身上話を致しませう』

『そりやア罪です、何も態々自分の過去を亭主に知らせる必要はないでせう。只だ私は爾う云ふ事が聞きたいのですから話して下さい』

流石の彼も、其の人の亭主の前で、過去の話を聞く氣にはなれないので斯う云ふと、

『宜いぢやありませんか、天野も薄々は知つて居るのですもの、斯うして一緒に居るやうなものゝ、又何うして別れるか知れはしないわ』

『貴女は亭主に別れるのを左程苦痛とは思ひませんか』

『苦痛』

とお粂は輕く笑つて、

『苦痛なんか思ふものですか。私は何とも思つてやしませんわ。又そんな事を思つてた日には、斯うして生きて居られやしないわ』

『貴女は先天的樂觀主義の人ですね、子供の時から苦勞した事は無いでせう』

彼は此の樣な事を云つて、女の話を釣り出さうとする。

『先天的樂觀か悲觀か、知りません。人間は生くるやうにしか生きないのですもの』

斯う云つて、華やかに笑つた。快活な、生々した樣子は、どう考へても二十六とは思はれぬ若さである。

『貴女の家は、甲府でも隨分舊家だと云ふぢやありませんか、何故そんな風になつたのです』

『舊家だつて何だつて、私そんな事は構やしないわ。而し生れ付ての斯う云ふ女で

はなかつたのですけれどね』

流石はお粂は女だ、氣の弱い事を云つた。彼は、今まで強い一方であつた女が、急に此の弱音を洩らした事を、逸す可らざるものであると考へて、

『戀に破れて、世の男を呪ふと云ふのでせう、負けぬ氣の女としては、世の中に能くある例ですから』

斯う云ふ場合、斷定的に云つて、對人の氣を引き付けると云ふのが彼の癖である、若し夫れが外れるやうな事があると、

『何うも爾う云ふやうな事情がある樣に思はれますね』と後を濁して了う。而し人の氣を察して、刹那の色に其の人の心を讀んで云つた事には、大概の場合には外れるものではない。當らずと雖も遠からぬ範圍である。

『おほゝゝゝ、男を呪ふやうに見えますか、すると天野も呪はれて居るのですかね』

お粂は斯う云つて四邊を顧みた。

『能くある事ですよ、今日まで自分に全身の愛を注いで居たとばかり思つて居たのが、外に女を拵へて居たと云ふ事が分つた場合、其の男の薄情を怒つて、自分が他に男を拵へた抔と云ふ實例は屢々あるものですからね』

『爾うですかね』

お粂は他人事でもあるやうに笑つて居る。此の儘では、お粂の正體を語りさうにも無い。彼は、自分ながら是れを腑甲斐なく思つた。之れだけ露骨に切り出して置きながら、夫れ以上に話を釣り出す事が出來なくて、夫れで自分の職責が今後全うせらるゝかと云ふ事まで考へた。彼は默つてお粂の顏を見て居たが、

『蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲で、爾うやつて貴女が坐つて居れば、何處に出しても立派な奥樣であるが、過去血塗れになつて寐て居た事を思ふと、人は見かけに依らぬものですね。彼の男に對しては何とも思つては居ないですか』

『おほゝゝゝ、亂暴な奴には仕方が無いわね。矢ッ張り私に未練があつたのですよ。人に祿々滿足も與へず、夫れで何時までも一緒になつて居て呉れと云つたからとて爾う安くは問屋で卸しませんからね。彼ア云ふ奴には心の苦痛を見せるが宜いのです。私に惚れて居たとすれば、其の女から逃げられると云ふ事は、彼奴に取つて一番苦痛でしようからね』

『他人の苦痛を見て、密かに快哉を叫ぶと云ふのは、隨分殘忍ですね』

『だつて、私もそんな目に逢つた事があるのですもの、浮世は廻り合はせですからね』

(三) 處女から一足飛に母

お粂は斯う云つて、飛々に自分の素性を語り出した。接ぎ合はせて考へて見ると大體次の樣である。

お粂の家は甲府の呉服屋である。兄一人に妹一人の三人兄弟。子供の時から蝶よ花よで育て上げられた。十六の年、伯母に當る神田の下村と云ふ雜貨商を營んで居る家に來て、某高等女學校に通學する事となつた。未だ浮世の荒波を知らぬお粂は、目まぐるしいやうな、東京の明るい、華やかな空氣に心をそゝり立てらるゝばかりであつた。

子供の時から勝氣な性分は、成人するに從つていよ〳〵負け嫌ひとなつた。自分から云ひ出した事は、假令へ善惡に拘らず、之れを遣り通さねば已まぬので、屢々伯母を手古摺らして居た。而し學校の成績は非常に好かつた。一年二年三年と、常に優等の成績であつた。處がお粂の十八の春、不圖した事から早稻田の文科に在る岡部と云ふ若い男と相思の仲となつた。そして間もなく姙娠した。お粂が此の旨を岡部に告ぐると、

『只今の身分で何うする事も出來ないぢやないか』

今日まで生死を共にして呉れるものだと思つて居たお粂は、此の冷やかな男の言葉を聞いて憤らずには居られなかつた。

『腑甲斐ない方ですね、無責任な男ですね、自分の子供の處置をも付けきれない樣な者には用はありません』

お粂は斯う云つて男を棄てた。男の方でも夫れを幸ひに喜んで居た。而し、一度は斷定したものゝ、お粂は弱らずには居られない。月の經つに從つて、學校に通ふ事も出來なくなつた。左りとて家に歸る事も出來ない。毎日々々夫ればかり苦に病んだ。伯母は陰に呼んで不心得の無いやうにと諭して呉れたが、お粂には何の藉慰にもならない。

乙女心にも、お粂は種々に考へた。世間に對して面目無いから、寧そ一思ひに死んで了はうかと思つた事もある。そして或る寒い晩、とぼ〳〵と芝浦海岸を歩いたり、又は日暮里の線路を彷徨ふた事もあつた。然れども其の場合になると死ぬると

云ふ事が如何にも恐ろしい、怖い、お粂には遂に自らを殺すと云う事が出來なかつた。亭主の無い若い女が姙娠して、腹の處分に困ると云ふ世間體の不面目よりは、死と云ふ恐怖の方が強かつた。お粂は死を斷念し、不面目を忍んで、甲府の實家に歸らうと決心して此の旨を兩親に知らせて、身の誤ちを詫びた。すると、其のお腹で歸られては困る。兎に角東京でお產を爲て歸れ、子供は此方で處分すると云ふ事になつて、お粂は伯母の家でお產をする事になつた。月滿ちて生れたのは女の兒であつた。產後の肥立ちもよく、一月ばかり經つてお粂は甲府に歸る事となつた。子供は田舍の方へ里子に預ける事にした。

處女から、一足飛びに母となつたお粂の心の變動は並大體ではなかつた。

愛して居た男をも棄てた。世間體には面目を潰した。腹を痛めた子供は他人手に渡して了つた。誇つて居た處女の色香は失せて了ふ——。

斯う云ふ時にもお粂は流かなかつた。死ぬると云ふ事も爲し得なかつた。『何う

にかなるものであらう』と思つて、家に引つ込んで居た。

果して何うにかなつた。お粂を嫁に貰ひたいと云ふ人があつた。兩親は、今時まで今の儘に放つて置いたら、又甚麼間違ひが出來るかも知れぬと云ふので、お粂に緣談を勸めた。初めて嫁になる若い娘でありながら、彼れが好い是れが惡いと好き勝手を云はれぬ誤ちあるお粂は、默つて兩親の命に從ふより外に途はなかつた。

お粂が十九の夏、子供を生んだ身體を處女と見せかけて、人妻となつたのは、お粂の一生の幸福を奪つたやうなものである。何事にも頓着しないやうなお粂にも、此の自分を欺いて居ると云ふ事は、片時として苦しまぬ事はなかつた。亭主である歩兵中尉が、可愛がつて呉るれば呉るゝほど、自分の心が濟まぬやうになつて來た。遂ひに翌年の春に、お粂は何事をも打ち明けて了つた。中尉は一度は驚きもしたが、其儘に濟まさうとすると、今度は姑が聞かなくなつた。尤も夫れまで姑との仲は好くはなかつたのが、之れが爲め一層惡くなつた。二言目には、

『子供まで生んで居ながら、如何にも處女らしい風をして嫁入りするなど恐ろしい女ぢや』

と口癖のやうに云ふ樣になつた。お粂は懺悔するつもりであつたが、之れが爲めに却つて敵に彈丸を與へたやうなものである。

爾うしてお粂は破境の厄に逢つた。

(四) 女の生くる最後の手段

中尉の許を離緣されたお粂は、家には歸らなかつた。衣裳や指環を入質した金を持つて、再び東京に飛び出した。狹い田舍に居て、一生後指をさゝれるよりは、廣い東京で、勝手な生活を爲た方が宜いと思つたからである。其の時からして、お粂は普通の女ではなかつたのである。

東京に飛び出して來たものゝ、既う伯母の家に行く譯にも行かず、家には素より

音信不通、三崎町の某下宿に泊つて居る中に、金は消費ひ果たして何うする事も出來なくなつた。斯うした境遇になつた場合、女の陷る可き處は何處であるか、淪落の淵に蠢めく幾千萬の白粉の女の過去、卑しい男の弱點に乘じて生きて行かうとする暗の女の過去は皆爾うではないか。お粂は一度は其の道をも思つて見た。然れども夫れには餘りに素養があつた。無學で無さ過ぎた。然れども斯うした場合、女が生きて行くと云ふ最大の武力は、女として最も尊重しなければならぬのを、物品視すると云ふ事に歸納する。

『好いわ、已むを得ないわ、何うにか成るやうにしか成らないものだわ』

お粂は斯う決心して、同じ下宿に泊つて居た鄭と云ふ支那留學生と一緒になつた。そして飯田橋の近くに、二階を借りて半年ばかり居たけれど、直ぐに其の男とは別れて了つた。

夫れから間もなく遞信省に勤めて居る小川と云ふ若い男と根津に一戸を構えたが

お粂に取つては何處が氣に入らなかつたのか、之れも間もなく自分から逃げ出した。

斯う云ふ風にして、お粂は次から次へと亭主をかへた。

『金を貰つて、一夜の夢を結ぶと、世間では之れを賣淫と云つて罪にされますけれど、亭主として居れば、何人持つても何の事はないでせう。そして、自分の氣に入らぬ事があれば、此方で御免を蒙つて了ふのですもの』

お粂が恁麼事を平氣で云ふやうになつたのは、夫れから大分經つてからの事であつた。

遞信省に勤めて居る男を棄てゝから、今度は兜町仲買商の若い者と暫らく一緒になつて居た。上げ相場で五千圓ばかり儲けたと云ふので、其時は、お粂は帝劇も見物した。三越で流行の物も買つた。自働車で當度もなく亭主と一緒に東京市中を乘り廻しもした。而し夫れも刹那の影で、今度は瓦落ッと下げ相場に失敗して、二千圓ばかりの足を出したのを最後に、其儘縁を切つて、彼方此方と彷徨ふて居た。

若い美しいお粂は、其の容色が第一の武器である。其の武器の前には、大抵の男は——降參して了ふ。過日、未練の刄で斬り付けられたのは、某鐵工場の技手の許に居つた時で、之れはお粂に對しては、家來が主人の前に出た時のやうに頭が上らなかつた。唯々諾々是れ命に從ふと云ふ風で、別に生活上の不如意はないが、お粂に取つては、男として余り女にのろいと云ふのが物足りなかつた。

『生氣地なしだ、男の癖に女のやうだ、そんな事で出世が出來るものか』

お粂は何時もそんなやうな罵詈の言葉を浴せかけて居た。そして離縁れ話を持ち出すと、見る〳〵間に顏色を變へて、

『諾し生氣地なしの生氣地を見せてやる』

と云つて、突然懷中から短刀を取出して斬付けたのである。然れどもお粂は其の手を搔い潜つて戸外に飛び出したので、生命だけは取り留める事が出來たのであつた。

(五) 十人目の亭主は誰？

お粂は笑ひながら、

『私は淫賣ぢやありませんよ、内縁の妻でも、亭主持ちですよ』

と云つた。

彼は、金を取つて春を鬻げば罪になるが、自分は爾うでないと云つた事を考へて見た。そして女らしい智恵である。淺墓な考へであると思つた。而し斯う云ふ境遇にある女が、ドン底まで淪落せずに變つた道を歩いて居るお粂を面白い女だと思つた。

『結婚と云ふものも、斯う云ふ風に單純になると雜造はないものだね』

彼は暫らく經つて云つた。

『世間の人は、男に未練が殘るの何のと云ひますが、私には爾う云ふ事は少しもあ

りません。尤も眞實になつた戀は破れるし、夫れからは自棄になつた故もあるでせうけれどね』

『而し、夫れにしても未だ若いのだから、今の天野君からは眞實の亭主である。偖老同穴の契りを結んだのであると云ふ、眞の夫婦の情愛を味ふやうにしたら宜いだらう』

『夫れは駄目な事です、幾ら何と云つてもそんな事が出來るものではありません。破れた瓶を接ぎながら、破れたものでないから立派な物であると思へと云つたからとて誰れも其の氣になれるものではありますまい。一度心が荒んだものを、素に歸さうとしても駄目ですよ。又眞實に戀を味ひたいとも思ひません。世の中には既うそんな眞劍な男は一人も無いと思つてますからね』

お粂は斯う云つて、

『私は既う斯うして一生を送るのです、男の方から嫌はるれば出て行きますし、私

の方で飽きて來れば御免を蒙ります。何故そんな氣になつたと仰有るの、そりやア困ります、何故爾う云ふ氣になつたのかお尋ねになつても私にも分りません。私は只だ斯うやつて生きて居るのが樂しみなんです。不自由と悲觀とは此方で何時も御免を蒙ります、之れが私の病氣ですから仕方ありません』

斯う云はれて見れば何う云ふ事も出來ない、不自由と悲觀とは此方で御免を蒙むると云ふ、お粂が何度も亭主を持ち變へるのは、亭主を變へるのではなく、滿り不自由と悲觀とに對して御免を蒙むつた譯である。

お粂と天野とは、今の處では不自由も悲觀もないらしい。天野が一歩踏み誤つた時は、お粂は第十人目の亭主を持つて華やかな生活を爲て居る時であると思ひながら、彼はお粂の美しい面を凝視つて居た。

□世の中の女と女

(一) 嫁と姑

昔から敵同志のやうに思はれて居るのは嫁と姑とである。姑に取つては、自分の腹を痛めて產んで、手鹽にかけて育て上げた可愛い息子の嫁であるから、憎からう筈はないのが、之ればかりは理屈で行けぬものと見えて、何處の家でも姑と嫁との仲は惡いに極つて居るやうである。之れに付ては、敎育家とか、宗敎家とか云ふものが、頻りに力を致して、嫁、姑の仲の好くなるやうに、種々の方法を講じて居るやうであるが、而し、學問の力でも、宗敎の力でも、之ればかりは何うする事も出來ないらしい。近頃、此の嫁と姑と云ふ事で、大分問題になつて居るのは、例の淡路の百萬長者の娘が、姫路の大地主で五十萬圓ばかりの資產を有する某家の長男農

學士の妻となつたのが、離緣さるゝ事となつた。而かも二歳になる娘を連れて實家に歸る事となつたのである。其の女は温良貞淑で、自分は一度は歸るものゝ、更らに夫は自分を呼び迎へて吳れるものだと信じて居た。而しながら其の夫である農學士は、母の意をばかり慮つて、幾度か妻から寄越さるゝ手紙に返事をだに送らなかつた。可愛い娘を抱いて、夫の音信をばかり待つて居た女は、破境再び元に復らぬと知つて、遂に娘を抱いた儘和田岬の冲合に投身したのである。

此の女の姑に當る、農學士の母である人は、非常の强慾張りである。嫁の實父が病氣だと云ふ知らせがあつた時、萬一の場合には困るから、今の内に片身を分けて貰つて來いと云ふ程の女である。之れも、其日に困つて居る家であれば兎に角、幾十萬の資產を有つた、土地での大地主である人が、斯う云ふ淺猿しい事を嫁に命じたのである。然れども親子として、未だ父の存生中から片身を吳れと云ふやうな事を云はれやう筈はない。嫁は毎日のやうに小言を云はるゝ姑の前を忍んで居た。其

の中に愈々父は死んだ。葬儀に列する爲め嫁が行かうとする時更らに、

『今度こそは片身を貰つて來るのですよ、片身を貰はねば歸られませんよ』

と云つた。嫁は其の言葉を承知して淡路の實家に行つた。葬儀は濟んだ。而し肉親の者の集ひとは云へ、未だ悲しみの去らない前から、自分ばかりに片身を吳れと云ふ事は、何うしても口を出でなかつた。姑の手前を思はぬでもなかつたが此の場合、嫁は夫れ以上に父の死を傷んで居たのであつた。

悄々と歸つて來た嫁の姿を見た、姑は莞爾やかに、

『どれお土產をお見せ、何萬圓貰つて來ました』

と手を出した。嫁は涙を湛えた眼を速瞻いて、

『阿母樣、今暫らくお待ち下さい、只今實家では大變混雜して居るものですから、跡片付けが濟みますれば、屹度父の片身を貰つて參りますから、何うぞ夫れまでお待ち下さいませ』

と賴んだ。今まで莞爾やかであつた姑の顏色は急に變つた。

『何を云つてるんですよ、片身別けと云ふものは、葬式を出して、親族の者の集つて居る時に爲るものですよ。後になつて屹度貰つて來る抔と云ふ事があるものですか、淡路の百萬長者とも云はるゝ者が、片身分け一つしないとは何と云ふ事です。お前は意氣地が無いから貰つて來る事が出來ないのです。そんな意氣地の無い女は、悴の嫁に爲て置く事は出來ません』

姑の憤りは非常なものである。嫁は幾度か謝つた。然れども姑の怒りは釋けなかつた。夫れからと云ふものは、姑は毎日々々此の事ばかりを云つて嫁を責めた。此の場合、大抵の夫であれば、母の非道を說服すべきであるが、此の農學士には夫れだけの氣力は無かつた。只だ母の云ふが儘に爲て居た。妻の立場の苦しいのを救ふて遣らうともせず、非道の母の言ふ事を默つて聞いて居た。

嫁は幾度か、

『金！　金！』

と絕叫した。自分は百萬長者の娘である。夫は大地主の長男で、何十萬の資產を有して居る。夫れにも拘らず自分は倘ほ金から呪はれて居る。實家に歸つて此の事を話せば、姑の氣に入る位の片身分けは呉れるであらうが、實家の財產のある間は、姑は常に之れを狙つて、何彼につけ自分を苦しめるやうな事はなからうか、自分の幸福は、金と云ふものゝ爲めに破壞し盡される破目に立ち至るやうな事はなからうか。嫁は斯う思ふと立つても居ても堪らなくなつた。其の內に姑の態度は益々荒々しくなつた。嫁は其の苦痛を忍ぶ事が出來なくなつた。可愛の娘は、之れを自分の手許から離す事は出來ない、遂ひに意を決して離緣され和田の岬の海の藻屑と消え果てたのである。

斯う云ふ境遇にある姑と嫁とに對する世の中の批評は何うであるか。敎育家も此の問題に付ては大分研究して居るやうである。殊に婦人に關する雜誌は、此の事件

に付て社會の凡ゆる教育家の意見を求めて居るやうである。嫁と姑、何方が惡くて何方が宜いと云ふ事は自ら判明されて居るが、同じ姑と嫁との關係でも斯くまで極端に、露骨に、其の性格を現はした問題は近來稀れに見るもので、

姑の嫁に對する憎惡の念に、黄金魔と云ふものが油を注いで、此れに火を放つたから、其の憎惡の念は更らに一層熾烈となつたのである。

其の熾烈の憎惡は、遂ひに人生の大慘劇を産み出して幕を閉ぢたが、此の問題からは、更らに、

金！　幸福！。

と云ふ事が個々別々に働くものであると云ふ事を立證する樣になる。金さへあれば幸福であると云ふ觀念を根底から破壞する事となるのである。犬猿只ならぬを嫁姑と云ふが、扨ても忌はしき事である。

（二）姉と妹

鈴ケ森の慘殺事件は、社會の耳目を聳動せしめたものである。之れが犯人の嫌疑者として、警視廳に檢擧され、將さに斷罪せられんとした小守惣輔は、他に眞の犯人が現はれたので放免された。

惣輔は、警視廳で拷問された結果、己むなく無實を自由したと云つた。其の結果法曹社會の問題を惹起して、議會に人權擁護案を提出する。尾崎司法大臣の彈劾演說となる。政府與黨である同志會中正會の喧嘩となる。第三十七回帝國議會に於ける棹尾の大活劇を演ずる事となつた。尤も其の以前から、此の人權擁護案は問題になつて居たのであるが、之れが最近の導火線は、此の惣輔が拷問されたと云ふ告白からである。

然しながら、夫れは別問題である。此の小守惣輔が、愈々放免される事となつた

時、世の中の非難は一齊に警視廳に注まつた。其の時、橋瓜捜査係長は恐る可き事實を告白して居る。其の大要は斯うである。

小守惣輔を檢擧した當時は、自分は未だ現職に付いて居なかつたから、何う云ふ事であつたか詳しい事は知らぬ、惣輔が寃罪であつたとすれば實に氣の毒である。而しながら惣輔が何故嫌疑を受けたかと云ふに、彼れは非常な殘忍性の男であるからである。即ち先妻との間に子供まであるのを放逐して自分の情婦を引き入れた。そして其の情婦の妹をも家に置いて居る間に、此の妹をも遂に强姦して、姉と妹とを兩手の花と眺めて居た。夫れも隱れて爲るのでなく。姉妹を自分の兩側に寢かせて居た。嫌やだと云ふと暴力を加へる、爾うして彼は尙ほ且つお春をも情婦に有つて居た。お春が鈴ヶ森で慘殺された當時、お春の持つて居た春畫を惣輔が持つて居たと云ふので、彼れは嫌疑を受けたのである。此の前後の彼の行動に徵して見ると、彼れは普通人の爲し得ない事を平氣に爲す男である。

此の姉と妹とを、共に自分が慰んで居たと云ふ事實は、責任ある橋瓜捜査係長の公言した處であるから間違ひはない。

男女間の關係は、局外から判斷する事の出來ない場合が往々ある。不義の仲であるとは云へ、兎に角內緣の妻となつた姉は、惣輔は自分の良人である。大事の亭主である。其の良人が、他に情婦を拵へるとか、妾を圍ふとか云ふのでも、夫れを知つては決して氣持の快いものではない。家庭の圓滿に行くべき筈はない。安田善三郎と云ふ人は、一夫多妻主義で國技館に角力見物に出かけるにも、本妻と妾とを同道して、高棧敷に陣取り、一ッ蜜柑を分けて食べるほどの睦まじさと云ふので、大分噂の種になつたが、之れは除外例と見ねばならぬ。此の人が本妻と妾とが仲が好いと云つて、他の人も爾うであらうとは云はれない。之れが他に圍つてさへ夫れである。而かも惣輔の姉妹に於けるのは、此の姉妹を一ッ家に置いて、互ひに自分の意志の儘に動かして居たと云ふのであるから驚かざるを得ない次第である。

而かも、夫れは一時的のものでない、惣輔が嫌疑を受けて收監されてから、姉妹は別々になつたけれど、惣輔が家に居るとすれば、夫れは永久的のものであつたに違ひない。從つて之れを姉妹の方から見れば、姉が内縁の妻だけに、當然本妻の地位で、妹は妾である。而しながら斯う云ふ風に、妾ともつかねば、情婦ともつかぬ、自分の家に姉妹が同棲して居るとすれば、其の間の區別が付かなくなつて來る。姉妹共有の亭主と云ふ珍妙な日本古來の道德を破壞し、人倫を蹂躪した怪しなものが出來上るのである。

由來、男と云ふものは、出來得べくんば多くの女を慰さみたいと云ふ考へを有つて居るから、女の方で夫れに甘んじてさへ居れば男に不平のあらう筈はない。世間體だとか、道德とか人倫とか云ふものゝ爲めに遠慮して居るが、一歩夫れを蹈み破つて了ふと、情慾の爲めに自分と云ふものゝ人格、地位を擲つて了ふと、何者の非難も制裁も恐るゝものではあるまい。惣輔の如きが夫れである。而かも此の情慾の

犧牲となつた姉と妹とは何うであるか。

嫉妬、猜疑、悋氣は女に通有のものである。知らぬ女を、知らぬ處に圍つて居てさへ家庭は風波の起るもの、夫れが現在の妹であつて、現在自分の目の前に在る場合、姉は如何に之れを看過して居たであらう。惣輔は、現在自分の姉の亭主であると知りながら、妹は如何なる感想を有つて姉と惣輔に對して居たであらう。斯うした魔の手に呪はれ、情慾の犧牲となつた姉と妹、夫れが仲好く行けると云ふ理屈はない。親の血を承けた姉妹も、魔の手に捕はれたとは云へ、男に肌を許しては、姉妹であつて姉妹でない、姉は妹を怨み、妹は姉を恨む、爾うして姉妹は、惣輔が嫌疑を受けて收監されると、別れ〳〵になつたのである。此の姉と此の妹、夫れを綾なして居た惡魔の呪ひ、姉妹多い世の中に、恁麼姉妹は類はあるまい。

(三) 兄嫁と弟嫁

江の島に、若い女同志が、燃ゆる緋縮緬の腰帶で、互ひに身體を括り合はせた抱合ひ心中のあつたのは、大正四年八月の何日だつたか。種々取調べた揚句、夫れは本郷に住む豫備陸軍中佐の小間使ひと下婢と知れた。而し原因は一切不明である。

此の抱合ひ心中のあつた時、若しも爾うではあるまいかと、捜しに來たのは山梨縣の某豪農の主人であつた。尤も其の以前から、各警察に捜査願ひは出してあつた。女二人、一人は色白く髪濃く、丈けは四尺八寸五分、縞お召の單物に博多の單帶、髪は束髪で年は二十三、一人は丸顔の、色淺黒く、前歯二本に金の入歯、丈けは四尺九寸、紹お召に羽二重と繻子との打合せ帶、髪は束髪で年は二十一、金を三百五十圓所持して居るが、自殺の恐れがあると云ふ事であつた。

此の捜査願ひを出してから間もなく、江の島で若い女の抱合い心中があつたと聞いたので、適確夫れに違ひないと、家人は驅け着けたのであるが、幸ひにして夫れは人違ひであつた。そして此の捜査願ひを出された二人の女は、鎌倉の宿屋に泊つ

て居るのを發見して、其儘家に連れ歸られた。

二人の女は、色の白い方が兄の嫁で、丈の高い方が弟の嫁である。此の兄嫁と弟嫁とは何故大金を持つて家を飛出したのか、話は之れから本問題に入るのである。

此處にも嫁と姑の軋轢がある、加之、此の家には小姑が二人ある、姑嫁は敵同志と云ふが、嫁の爲めには小姑は鬼千疋と云はれて居る。姑だけでも嫁の爲めには隨分苦勞の種である。夫れに鬼千疋が二人もあつて、有る事無い事を姑に云ひ付ける、姑の眼は火のやうに光る、其の光りが嫁には何より苦痛である。

二人の嫁は、敵の中に人質となつたやうなものである。頼む良人も、田舍の常として、嫁の言葉に從ふと、鼻毛が長いの、二本棒の、薄野呂とか、嬶天下とか云はるゝので、母の意見に從つて居ると云ふ有樣、茲に於てか同病相憐れむで、二人の嫁は、陰になり陽になつて、互ひに慰さめ合ひ、力になり合つて居たのである。

斯うなると、二人は、二人の外に頼るものは無いやうに思はれる。弱い女心でし

て、弱い同志が一つに固まつて

『何故こんなに不仕合せ同志でせうね』

と一人が云ふと、

『何の爲めに生きてるのか分りませんわね』

と一人が云ふ。

『何時までも娘で居たかつたわね』

と愚痴を零すと、

『何故お嫁になんか來たのでせうね』

と涙を流す。そして毎日悲しい、味氣ない話しばかり續ける。

『恁麼苦勞を見るより、寧そ死んで了つた方が宜いわ』

『眞實に爾うですわね、私、つく〳〵世の中が嫌やになつて了つたわ』

他からの壓迫が酷いだけ、夫れだけ弱い者同志の心の結合は強くなつた。そして

二人の嫁は、遂ひに三百五十圓の金を持つて家出したのである。

『此のお金が無くなつた時は、二人で七里ケ濱の藻屑となるのね』

と兄嫁は云つた。

『私、何處までも姉さんと一緒に參りますわ』

と弟の嫁は云つた。そして二人は淋しい笑ひを洩らした。鎌倉から、片瀬、江の島

と、近い處を遊んで、明日は東京見物に出かけやうとする日、江の島の海岸に若い

女同志が、抱合つて心中して居たと聞いて

『世の中には、矢ッ張り私達と同じやうな身分のものがあると見えるわね』

『私達も、彼アやつて、身體を括り合はせ、死んでも離れないやうに爲ませうね』

二人は斯う云ひながら、流石生の羈絆を斷ちかねたやうに、互ひに抱き合つて宿

屋の一室に泣き明かした。二人の樣子が怪しいので、此の旨を宿から警察に屆ける

と、折柄尋ねて來て居た舅が、夫れこそ私の家の嫁二人に違ひないと云ふので、直

ぐに宿屋に來て見ると、案に違はず爾うであつた。そして二人は、

『何うぞ此儘にお見のがし下さい』

と云ふのも聞かず、再び鬼千疋、敵の家に連れ歸られたのであつた。

【酒と戀と女】
（正價金五拾五錢）

大正五年三月二十日印刷
大正五年三月二十五日發行

著者　東京市神田區北乘物町四番地　猪股平三郎
發行者　東京市神田區西小川町二丁目三番地　福田滋次郎
印刷者　東京市神田區西小川町二丁目五番地　森川修一
印刷所　大精社

不許複製

發賣元　東京市神田區北乘物町四番地　振替口座東京壹貳〇八六番　日本書院

日本書院發賣書目

大日本裏面史　價五拾五錢　郵六錢

女を中心としたる日本反面史　價五拾五錢　郵六錢

情的偉人を中心とせし日本側面史　價五拾五錢　郵六錢

幕末明治裏面史　價五拾五錢　郵六錢

酒と戀と女　價五拾五錢　郵六錢

西洋土産お伽十五夜　價四拾錢　郵六錢

獨帝粉碎論　價八拾五錢　郵八錢

日本征服論　價八拾五錢　郵八錢

失敗噺旅の耻　價貳拾三錢　郵四錢

落語十八番　價貳拾三錢　郵四錢

旅行家百癖　價貳拾三錢　郵四錢

大正膝栗毛　價貳拾三錢　郵四錢

抱腹絶倒滑稽笑話集　價貳拾三錢　郵四錢

新喜劇四幕　價貳拾三錢　郵四錢

諸國廓巡禮　價貳拾三錢　郵四錢

滑稽問答　價貳拾三錢　郵四錢

277
181

終